

【特集】阪神・淡路大震災から15年～開けてきた展望～ 住宅耐震化の展望

名古屋大学 福和 伸夫

あの日から15年が経つ。その時、建築物が凶器となった現場を見て、私たち建築家は、喪失感と自責の念を感じ、二度と同じことを繰り返さないと誓った。大震災での最大の課題は、現行耐震基準を満足しない既存不適格建物の存在であった。そして、住民の生活の場である戸建住宅の耐震診断・耐震改修の促進が急がれた。しかし、戸建住宅の耐震化は遅々として進まなかった。

そんな中、21世紀に入って、中央防災会議が中心となって、東海地震、東南海・南海地震、首都直下地震などに対する被害想定を実施し、その甚大な被害を軽減するために、十年での地震被害半減を目指した地震防災戦略を策定した。その根幹は家屋の耐震化であり、国民一人一人を耐震化の行動に誘発するため、災害被害を軽減する国民運動を推進することになった。

耐震化の推進にはヒト・コト・モノ・カネの4つのハードルがある。これを乗り越えるには、個々人の防災意識の向上、耐震化推進の仕組み作り、効果的で安価な耐震改修法の開発、耐震化を推進する資金援助などが必要となる。ここ数年、耐震改修促進計画などの耐震化の仕組み作り、静岡のTOUKAI-0 プロジェクトを始めとする安価な耐震改修法の開発、自治体の耐震診断・改修補助制度の整備など、コト・モノ・カネの問題は解消され、最後にヒトの問題が残った。

人の意識を変え、耐震化の実践に誘導するには、個々人が理屈を超えて耐震化の必要性を真に納得し、地震災害がわが身に降りかかる問題だと実感すること、そして、皆が耐震化の実践を互いに説得し合った上で、専門家が耐震化の解決策を提示することが効果的である。筆者の経験では、理解→納得→わが事感→説得&決断→解決策&実践のStepを踏めば耐震化は必ず成功する。

この実現には、まちを愛するお節介な住民と信頼できる専門家が鍵を握る。彼らを核に各地で産官学民が連携した地域ぐるみの耐震化協議会が設立され、防災まちづくり活動が始まっている。私たちの国も捨てたものではないと感じる。

マスメディアとして日ごろからできること 進歩したか？災害報道

読売新聞大阪本社編集委員 安富 信

1995年1月17日午前5時46分。読売新聞大阪本社社会部阪神支局次席(デスク)だった。この時を境に記者人生が一変したと言っても過言ではない。事件や災害、大事故の取材は重ねてきたが、この地震はそんなものを一瞬にして吹き飛ばした。誰のために記事を書くのか？その一点に悩むようになった。

しかし、1年が過ぎ、5年が過ぎ、10年が過ぎると、次第に社内には「風化」がはびこり始めた。震災10年を終え、神戸の人と防災未来センターに研究調査員として派遣された私に、厳しい言葉が突きつけられた。「マスコミは被災者の役に立たなかった」「行政に負担をかけるばかり」だ。

震災後、関西のマスコミ界では少なくとも、あの震災の体験を無駄にしてはいけない、と減災報道に力を入れる報道機関が増えた。朝日、毎日新聞は月命日の17日に特集記事を掲載。読売、産経も月末にそれぞれ啓発記事を載せるようになった。日経の関西版も力を入れている。テレビも折に触れて報道特集をする。しかし、それだけでは、まだまだ、だと思ふ。もう少しマスコミ内で横断的に自由に勉強出来る場がほしい、と感じていた。

そんな時、川崎一朗・京都大学防災研究所教授から毎日放送の大牟田智佐子さんを通じて、まさにそういった勉強会の創設のお誘いを受けた。同じ毎日放送の太田尚志さんや同僚らを誘って発足させた。名付けて「減災勉強会 愛称:関西なまずの会」。以来1年数か月、会は9回を数え、京大の阿武山地震観測所での実地見学や地震学会での活動報告なども経験し、12月19日には関西大学(大阪府吹田市)で研究者と行政マン、マスコミが合同で勉強会を行っている4つの地区(仙台、静岡、名古屋、大阪が拠点)の合同シンポジウムを開いた。

本当に勉強してほしい若手の記者の参加がまだ少ないのが、なまずの会の悩みだ。社の枠を越えて、研鑽を積み、東海・東南海・南海地震や上町断層直下型地震などの大地震や大災害を迎え撃たなければならない。

追悼 溝上恵先生

溝上恵 東京大学名誉教授が1月4日亡くなりました。



ゆかりの深いお二人から追悼文を寄せていただきました。

溝上恵先生を悼む

東京大学名誉教授 阿部 勝征

先生は、想定東海地震の前兆を検討する地震防災対策強化地域判定会の会長を12年間務められ、その間に予知の判断対象を漠然とした前兆らしき現象とせず、プレスリップ(前兆すべり)に限定することに変更しました。判定会発足から25年を経たの画期的な変更でした。それ以来、先生は、現在の東海地震予知は実際には予知でなく、地震が起きてからの「早期検知」とか「現行犯逮捕」のようなものだと語るようになりました。

思い起こすに、先生はメディアを通して専門的知識を絶えず平易な言葉で解説するよう努めていました。中央防災会議では専門委員として、東海地震震源域の見直しなどで豊富な地震学的知見を提示されました。このような努力が認められ、平成17年防災功労者総理大臣表彰を受賞されました。先生と飲み歩いた往時を偲びつつ、ご冥福を心よりお祈りします。

溝上恵先生のご逝去を悼む

気象庁地震予知情報課長 横田 崇

先生はお酒が好きな方で、私が大学院生の頃は、夕刻になると「やってるぞ」と言われ、酒を飲みながら地震予知や地震観測等について深夜まで議論し、興味深い話題になると宝物を見つけた子供のように目を輝かせて語られていました。翌朝「少し纏めどいた」と資料を手渡されることも屢々でした。先生は穏やかながらも激しい情熱を秘めた方で、「何事も正しい知識と考え、そして勇気を持った適切な判断と行動だ」と説かれ、社会情勢等も含め、「溝上節」と呼ばれていましたが、身振り手振り付きで風刺も交え面白くそして熱く語られていた姿が今でも印象的に思い出されます。17年間も癌と戦いながら、地震予知や観測に新たな道を開く一方、減災の啓発活動等にも取り組まれていました。先生のご意志を引き継ぐことを誓い、心からご冥福をお祈りいたします。